



世界インダストリアルデザイン会議

事務局: 東京都港区浜松町世界貿易センター別館4階 電話(03)432-7345-6

「地域別デザイン会議」の開催に関して

新緑の候、関係各位にはますます御清栄のことと、お喜び申し上げます。

さて、本'73年は、御存知の通りデザインイヤーとして私たちの生活におけるデザインの役割と重要性を再認識し、その啓蒙と振興を計る運動が、今、全国的に展開されています。

いうまでもないことですが、デザインはその本来の目的である生活に美と秩序を与える重要な役割をになうものとして、デザイナーはもとより、生活者みんなが考え実践する要素を多くもっています。最近の環境、資源問題等の人間生活の根底をなす話題から、生活に密着した道具世界、視覚世界に至るまであらゆる領域にかかわる問題をはじめとして、デザインが、今こそその本来の目的にかなうものとしての認識を、すべてのデザイン分野の人々が、考える場の中でもつことが必要とされているのではないのでしょうか。

おりしも、本年10月には京都において、世界インダストリアルデザイン会議(ICSID '73 KYOTO)が開催されることになり、世界の40カ国からデザイナー、学者ら500人、国内から1,500人が集まり、悩める物質文明にデザインからのスポットを当て討議を重ねる予定となっており、各界から大きな関心と期待がよせられています。

さて、日本におけるこのようなデザイン界の動きは、新しいソーシャルニードとして、これからの人間社会を形づくる大切な役割を内包しています。

世界インダストリアルデザイン会議(ICSID '73 KYOTO) 事業委員会では、こ

の機をデザイン界の一層の発展のための素地となすべく、それに先がけて「地域別デザイン会議」を全国的な連けいのもとに開催することを計画致しました。

その目的は

1. ICSID '73 KYOTO の開催を機会として、日本の各地域に点在しているデザイナーの関心を高め、この「地域別デザイン会議」を通して日本のデザイナーの共通の有意義性を確認するために、日本各地でこの会議を開催する。
2. この会議を通して、各地域のデザイン各界とデザイナー各人、さらにデザインにかかわる諸分野との交流を密にする機会を恒常的にするための有機的組織作りを目指すものである。

以上の2点です。

これらの目的と趣意を良く御理解のうえ、是非この計画に御賛同、御協力たまわりたくお願いいたします。

世界インダストリアルデザイン会議実行委員会

委員長 栄久庵 憲 司

「地域別デザイン会議」開催要項

- 会議開催形態：
 1. 主催 = 各地方地元団体（又はそれに相当するもの）
協賛 = 世界インダストリアルデザイン会議 実行委員会
各地方新聞社 等
 2. 共催（主催なし）= 各地方地元団体と世界インダストリアルデザイン会議
後援 = 各地方地元新聞社，放送 等
- 対象：地域デザイナーとデザインに関りをもつ周辺領域の人々50～100程度，
参加費の有無は地域地元側にて決定するが原則として無料とする
- 内容：その地域におけるデザインとその諸問題について
テーマは，各地域・地元が決定する（別紙テーマ案を参考のこと）
- 形式：
 1. 講演会
 2. シンポジウムのいずれかを選定する
 1. 講演会 = 地域地元側の希望する講師と ICSID '73 KYOTO
実行委員会からの派けん講師による講演会
 2. シンポジウム = 地域地元側の希望するパネリスト1人と地元側が決定する
地元パネリスト数人と ICSID '73 KYOTO から派
けんするパネリスト1人から構成されるシンポジウム
- 会議進行：主体は地域地元におき，地元側により進行される。派けん講師と地元パ
ネリストとのディスカッション形式となろう
- 開催費用：各地域地元と世界インダストリアルデザイン会議実行委員会のせっぱん
とする

地域地元側負担条件

- ① 会場の提供
- ② 地域デザイナー等への参加呼びかけのお知らせ全般
- ③ 地元側パネリストの折衝と謝礼
- ④ 会議後のこん親会等の開催費用

実行委員会側負担条件

- ① 地元側が希望する講師，またはパネリストの折衝と派遣のための往復交通費，宿泊滞在費，謝礼

以 上

世界インダストリアルデザイン会議 <資料1>

世界インダストリアルデザイン会議の概要

〔意義〕 「世界インダストリアルデザイン会議= ICSID '73 KYOTO」は、ICSID（国際インダストリアルデザイン団体協議会）の総会および会議を、アジアではじめて開催するものである。この世界会議がアジア、そして日本をその開催地として選んだのは現代の機械文明が人類につきつけている課題が、もはや日本を介さずには語れない証左である。

この現代にあつて、デザインに課せられた責務は、ますます大きくなりつつあり、これまでのように単に個々の物と対しているだけでなく、広く社会の諸問題を総合的に把握し、混乱した社会に秩序を作りあげ、そこに個々の物の像をつくり出していかなくてはならない。

「世界インダストリアルデザイン会議」はこのような背景の中で、'73年デザイナーにおける基幹事業の一つとして、産業と生活を人間の視座から再編成し、人間の新しい生き方と思想の確立を旨とする運動として開かれる。この会議において、世界のデザイン運動を積極的におしすすめている人々と一堂に会し、現在の変転しつつある世界を明確に位置づけ、日本の新しい行く手を明らかにしたいと願っている。

〔主題〕 「人の心と物質の世界」 （仮）

人間を豊かにするはずの物質文明が、そのあまりにも急激な発展のためにさまざまな問題を誘発し、影響を与え、そのとめどもない発展の行く末にはおそれすら感じられている。人々は豊かな物質文明の恩恵に浴しながらも、その心の中には満されないものを感じている。この物質と精神の二つの領域のかかわり合いは、人間のこれからの行き方を左右する大きい問題である。

この二つの領域にかかわり合い、それを結びつけていく役割と責任をもっているインダストリアルデザインは、今こそその本来の使命をはたすことが求められている。デザインの行為は物の世界から現代の生活、現代の社会、そして現代の世界のあり方を問いなおす行為であり、運動である。物と人との対話、精神と物質の交流の中から新しい生活の姿が生まれ、社会の新しい秩序が誕生することを願つてこの主題（仮）を決定した。

〔規模〕 会議の参加者は次のように予定している。

参加国 40ヶ国以上、参加者 国外400名、国内1100名

〔参加予定国〕 アルゼンチン、オーストリア、オーストラリア、ベルギー、ブラジル、ブルガリア、カナダ、中華民国、チェコスロバキア、デンマーク、フィンランド、フランス、ドイツ、東ドイツ、英国、香港、ハンガリー、アイルランド、イスラエル、イタリア、日本、オランダ、ノルウェー、ポーランド、南アフリカ、スペイン、スウェーデン、スイス、アメリカ、ソ連、ユーゴスラビア、インド、メキシコ、ニュージーランド、パキスタン、韓国、シンガポール、タイ、フィリピン、コロンビア、エチオピア

〔構成〕 世界インダストリアルデザイン会議は、ICSID加盟団体の正式代表とオブザーバーによつて開かれる「総会」と、ひろくインダストリアルデザインの発展に心を寄せる人々が参加する「会議」に分けられる。

総会=東京の経団連会館→国際会議場を会場として、世界中のインダストリアルデザイン界の活動報告とともにこれからの運動の方針が語られ、ICSIDの諸規程や役員を選出が行われる。

会議=世界インダストリアルデザイン会議の中心となるのが、この「会議」であり、「コングレス・ホール」、「コングレス・プラザ」、「コングレス・シティ」の三つの柱で構成される。

世界の偉大な頭脳によつて未来の方向を示唆し問題を提起していくコングレス・ホール、ホールで提示された問題を参加者自らのものとし、さらにそれをぶつけあうことによつてテーマを掘り下げていくコングレス・プラザ、そして会議の輪を会議を開催する都市全体へとひろげるコングレス・シティ、この三つの構想の中で会議は展開される。

コングレス・ホール=国立京都国際会館を会場として、世界の頭脳たちの鋭い洞察によるテーマの展開、追求が行われる。精神をメディアとする人と人との接点の場である。

コングレス・プラザ=ホールにおいて提起された問題を、参加者の各々がそれを自らの問題として追求し、それを掘り下げていくのがこのプラザである。このプラザは、世界中から集まる参加者一人一人の自分自身のワークによつて構成される。これはプラザにおける討論が現実の場をふまえて展開されることを期待するからである。

コングレス・シティ=ホール、プラザが会議場の中にその場を求めるのに対し、このシティ構想はそれをシティ全体の中に拡げようとする考えである。シティの中で世界中から集つたインダストリアルデザイナーとその推進者たちが交流し、接し合うことによつてこの会議

に一層のひろがりと深さを与えようとするものである。

〔日程〕 1973年10月8, 9日 於経団連会館 ~~国際会議場~~

「総 会」

1973年10月11日 於国立京都国際会館

午前 「会議」 開 会 式

午後 「会議 I」 「コンgress・プラザ I」

10月12日

午前 「会議 II」

午後 「会議 III」 「コンgress・プラザ II」

10月13日

午前 会議総括報告

午後 「会議」 閉 会 式

〔関連事業〕 世界インダストリアルデザイン会議の成果をあげるためには、会議の広報活動とともにそれに関する関連事業が重要な意義を有している。関係各分野およびデザイナー運営会（仮称）と協力し、その目的達成のために次のような事業を展開したい。

展 示 会

セ ミ ナ ー

記 念 出 版

そ の 他

〔シンボル・マーク〕 世界インダストリアルデザイン会議= ICSID '73 KYOTO のシンボルマークのデザインは、オリンピックのポスターなどで有名なグラフィックデザイナー—亀倉雄策氏（57才）の手になるもので、この会議の成果がひろく世界に、そして生活の中へとひろがっていくことを願ってデザインされた。

（以 上）



世界インダストリアルデザイン会議 <資料2>

ICSIDとは

ICSID(International Council of Societies of Industrial Design = 国際インダストリアルデザイン団体協議会)は1957年に設立され、1972年7月現在35ヶ国、57団体が加盟している世界的なデザイン運動の推進機関である。ユネスコ、UNIDO、ILOなど国連諸機関や各国と協力して国際的な諸活動を展開している。

その目的はインダストリアルデザインをより高い水準へと発展させること、インダストリアルデザインの役割を進歩させ拡大すること、人類の精神と物質に影響を与えるさまざまな問題の解決をはかつていくことである。

その活動は、発展途上国のデザイン振興のための協力、インダストリアルデザイナーのレベルを向上させるためのインターデザインセミナー、デザイン教育について討議をかわす教育セミナー、各国のデザイナー共同によるプロジェクト開発、インダストリアルデザインについての国際規約や用語の制定など幅広い分野にわたっている。

その一環として2年ごとに、世界の加盟国において開かれる「世界インダストリアルデザイン会議」は、世界のインダストリアルデザイナーが一堂に会して、デザインの今日の課題や責務について世界的な規模で発表や討議を行い、これまで数多くの注目すべき成果をおさめている。

ICSID事務局はベルギーのブラッセルにおかれ、その理事会は会長以下10名、仏、英、米、ソ、西独、東独、伊、ベルギー、カナダ、オーストリア、日本と多彩なメンバーで構成されている。そのほか教育、振興、情報、災害などの専門委員会がおかれ、実際の活動展開をおこなっている。

日本からは社団法人日本インダストリアルデザイナー協会、工業技術院製品科学研究所、財団法人日本産業デザイン振興会の3団体が加盟している。

(以上)

世界インダストリアルデザイン会議 <資料3>

インダストリアルデザイン (Industrial Design)

略してID、あるいは工業デザイン、産業デザインとも呼ばれる。広義には、工業的な生産活動の全般に関するすべての設計、造形活動をさすが、狭義には、大量生産される工業製品のデザインについていわれる。

〔目的〕 製品の外観を美しく造形することが、デザインの目標の一つであるが、工業製品では外観はその機能、材質、加工技術、生産コスト、市場性に適合することが求められ、さらに使いやすさ、安全性、維持・管理の容易さなどが審美性とともなデザインの目標と基準となる。

すなわちインダストリアルデザインは、美、機能、経済の各要素を一つの製品の中で融合させ、総合的な問題解決をはかることであり、インダストリアルデザイナーには、高い造形感覚とともにすぐれた総合的能力が求められる。

〔現代的意義〕 トランジスタやICの発明は、製品の小型化を可能にし、プラスチックの開発は造形の枠を飛躍的に広げた。インダストリアルデザインの役割は、このような技術の成果を生活の中へもちこむための橋渡しをし、新しい生活様式の一部に転換していくことにある。技術の進歩は、インダストリアルデザインに大きい影響を与え、新しい美を生み出す源ともなっている。

新時代の感覚にみちた製品は、新時代にふさわしい生活像を与え、新しい生活を示唆する無限の力となる。

〔対象〕 “口紅から機関車まで”とか“マッチ箱から摩天楼まで”といわれるように、インダストリアルデザインの対象は非常に広い。その中でも冷蔵庫、洗濯機、家具などの家庭機器・設備、自動車や航空機などの輸送機器、カメラなどの光学機器、ステレオなど音響機器など日常生活になじみ深い分野をはじめ、医療機器、工作器機、農業機械などが中心となっている。

またやゝ視覚的要素が重視されるパッケージングの世界もその対象であり、最近とみにインダストリアルデザインの新しい領域として注目されているのが街路灯、歩道橋などの戸外

施設や量産住宅といった環境領域である。今後技術と社会と人間の求める対象が拡大するに
したがって、インダストリアルデザインの領域はますます広がっていくことになるだろう。

〔歴史〕 インダストリアルデザインは、イギリスでおこり、ドイツで発展し、アメリカで
普及したといわれる。

イギリスは産業革命のおこつた国にふさわしく、工業製品をデザインすることに価値を認
めた最初の国である。19世紀はじめの英国議会では、美術を工業製品に応用した時の利益
が議題となつている。一方1860年頃にはアート・アンド・クラフト運動がおこり、当時
出まわつていた機械製品にみられる機能性のない過剰な装飾を問題として近代デザイン運動
の先駆となつた。

ドイツでは、技術の改善と品質の向上を目標として、1907年にドイツ工作連盟が生ま
れた。ドイツ工作連盟は芸術家、職人、企業家がデザインのすぐれた製品を生産しようとす
る協力機関であり、最初の近代デザイン運動といえる。有名なバウハウスは1919年に開
校され、造形教育と技術教育を二本の柱とする教育は美的感受性と技術的知識をあわせ備え
た近代的デザイナーを生み出す道を開くとともに、近代デザインの理念を集大成した。

ヨーロッパに芽ばえた近代デザインについていえることは、それが19世紀末から20世
紀にかけての前衛抽象芸術運動とそれまでの工学技術の交点に成立したことである。そこで
つちかわれた近代デザインの思想や概念はのちのちまで世界中に大きい影響を与えている。

インダストリアルデザインが普及し、生活の中に根をおろしたのはアメリカにおいてであ
つた。1920年代の末期にその芽ばえが生まれ、〈流線形〉が一世を風びした30年代に
開花し、第2次大戦後に全面的展開をみせた。重要なことはインダストリアルデザインが職
業として成立したことと、デザイン活動の原型が確立したことである。1919年J・サイ
ネルは企業に与えていたサービスを名づけてインダストリアルデザインと呼んだ。これがこ
の呼称の起こりといわれている。

日本のデザイン活動は明治中期のデザイン教育機関の設立をもつてはじまる。工芸の振興
が国家産業の育成と工業立国に役立つとの立場から各種工芸学校や図案科の開設、国立産業
工芸指導所の設立、外国人デザイナーの招聘などさまざまな施策が行われた。

第一次大戦後から昭和初年にかけてのデザイン活動の興隆期には、そのデザイン上の理念
や制度の上でヨーロッパの影響、中でもバウハウスやドイツ工作連盟の影響をうけている。

しかし、第二次大戦前はこうした努力にもかかわらず、工芸ないし応用美術の域を出ることなく、経済、社会、技術、生活感情など、どの面でも成立の期は熟していなかつた。

したがって、日本におけるインダストリアルデザインの本格的な発展は戦後にはじまるといつてよい。平和に生きる日本の産業にとつて欠くことのできない分野として新たな活躍がはじめられた。1947年ごろからインダストリアルデザイナーの手になる製品が出はじめ、インダストリアルデザインという言葉も社会で用いられるようになってきた。1951年のレイモンド・ローウィの来日はインダストリアルデザインの存在や役割をひろく一般に知らせ、関心を高める役をはたした。

1952年10月には25名のデザイナーによつて日本インダストリアルデザイナー協会が設立され、日本においてもインダストリアルデザインの分野が確立されていた。通産省も57年以降グッド・デザイン制度を設けるなどデザインの振興につとめている。

こうして行政、企業、デザイナーとの相互の関係によつて、日本のインダストリアルデザインは大きく発展をとげ、その生長ぶりは海外からも注目されている。

(以上)